

洗礼者ヨハネとイエスの問題

岡 精 三

前 書

私は “Biblical Hermeneutics An Introduction” by Duncan S. Ferguson (SCM Press 1986) を偶々一読する機会を得た。「聖書の（にある）聖書解釈（学）の手引」とでも訳すべき表題であろうか。著者の意図を極く簡単にかい摘んで要約すると、“今日のキリスト教世界の混乱を生み出している原因の一つは聖書が Interpretate（自由に解釈）されて読まれ、Hermeneutic（聖書にある解釈）によって解釈されず読まれてこなかったことにあ。そのことが近代にいたって漸く問題視されるようになって来た。” ということである。私はこの本を読み終わった時、今日までの聖書学は細目に目がひかれて大局を逸してきた嫌いがあったのではないか、といった想いがした。その頃、これも又偶々一読する機会に恵まれたのであるが、菅 円吉著、竹内寛編の “キリスト教とは何か”（聖公会出版社 1988）を読んだ。その106頁には “教会とは、神の言であるイエス・キリストの言が本当に現実にかたられる所であるとすれば、それはとりもなおさず、聖書を通してイエス・キリストの言がかたられるのが聞かれる所、あるいは聖書を通してイエス・キリストが本当に私に向かって「私に従え」「わたしに委ねよ」と呼びかけてくるという事が起こるところである。そしてそういう事が起こる所とは聖書が使徒の正しい教えの上に立って説教される所である。” “第一義的な意味において、聖書を正しく教えること、宣べ伝えることは、使徒の正しい伝統を伝える人である牧師によってのみなされるのである。” と記されている。

將に菅 円吉の言う通りであるが、もしもその通りであったなら、Duncan

の言う Biblical Hermeneutics の問題は起こらなかったかも知れない。日本聖公会の綱憲には、「全世界の聖公会と共に聖公会綱憲を遵奉する」と明記して、「旧約及び新約の聖書をうけ、之を神の啓示にして救を得る要道を悉く載せたるものと信ずる」とあり、その第四には「使徒時代より継紹したる主教、司祭、執事の三職位を確守する」と明記されている。

しかし、教会の歴史の実際は、「使徒時代より継紹した」ということが Biblical Hermeneutics の継紹にある、というよりはむしろ聖職者個人に与えられた、主教、司祭、執事という職位に拘わる権威の継紹とされがちであった。そして、それが行きすぎた場合、教会はいつも墮落したのであった。キリストの教会を使徒時代から継紹された生けるキリストの教会とするためには聖書が正しく読まれなければならないのである。しかし、聖書程その読み方によって意味内容が左右される書物は他にはないと言えるかもしれない。そのことが実は Biblical Hermeneutics の問題を Ferguson が取り上げなければならなかった問題点なのであると思う。

私自身のことを延べると、私が聖書の読み方、解釈の仕方に疑問を抱き、次第に深く考えながら読むようになったのは修女会の礼拝を手伝うようになってからのことであった。毎朝のミサに福音書に就ての手短かな黙想のヒントをあたえることの必要から、それまでは何も気付かずに読み過ぎて来たことの中に見過すことの出来ない大事な意味がふくまれていることに気付かせられたからであった。恥ずかしい告白になるが、以前の私は週に一度の教会での説教を準備するために、聖書を学ぶ、というよりは、聖書に当たる、と言った方が妥当な聖書の読み方をしていたのであった。私には上述の Biblical Hermeneutics の問題は未だ十分にわかってはいないが、考えさせられることは大変に多い。そのようなことで、日頃考えさせられて来た幾つかの問題の中から「洗礼者のヨハネとイエスの問題」を取り出して物してみたい。これは大方の失笑を買う勇気をもってのことである。

(1)

共同訳聖書のマタイ 3 : 1～12には“洗礼者ヨハネ、教えを宣べる”と表題が附されている。この記事はマルコ 1 : 1～8, ルカ 3 : 1～9, 15～17に同じように記されているが、夫々が独自のものに思われる。

マルコは 1 : 4 に、“洗礼者ヨハネが荒野にあらわれて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。”と記しているが、どのような悔い改めなのかは少しも記していない。

その点をマタイ (3 : 7～10) とルカ (3 : 7～9) は補足しているように見える。しかし、マタイは“ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て” (3 : 7) となつていますが、ルカは、“洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に” (3 : 7) となっている。対象がちがっていることが注目される。本文はマタイ、ルカ共に殆どおなじである。マタイは“「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。いっておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元におかれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火になげこまれる。(マタイ 3 : 7 b～10, ルカ 3 : 7～9) と記している。

しかし、ルカは更に悔い改めの実例をあげて、“そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も「このわたしたちもどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネはだれからも金をゆすり取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。” (3 : 10～14) と記している。しかし、マタイはこの部分を何故か省略しているのである。

この省略について、私が興味を持つようになったのは、この省略された部

分が、少なくとも意味内容の上では、補足されているように思える記事をマタイは、21：28～32「二人の息子」のたとえ、に記しているように思えるからである。この「二人の息子」のたとえは、「権威についての問答」（マタイ21：23～27，マルコ11：27～33，ルカ20：1～8）に引き続く記事である。しかし、そこではマルコもルカもこれを省略している。この「二人の息子」のたとえに就ては後で延べることにして、比喩ではイエスの先駆者、ヨハネの存在が、単に悔改めの洗礼を施すためだけにあったのではないということを留意しておきたい。共観福音書に見られる、これと関連する幾つかの点に就て更に検討してみたい。

（２）

“断食についての問答”（マタイ9：14～17，マルコ2：18～22，ルカ5：33～39）は夫々の福音書に略同じように記されている。一番簡潔に記しているマタイは、“そのころ、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「わたしとたちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」と言った。イエスは言われた。「花婿が一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時がくる。そのとき、彼等は断食することになる。だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎをあてたりはしない。新しい布切れが服を引き裂き、破れはいっそうひどくなるからだ。新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。そうすれば両方とも長もちする。」”と記している。話の筋に直接かわることではないが、大変奇妙に思える相違が夫々の福音書に見られる。マタイはイエスの所に来た質問者を「ヨハネの弟子たち」と記しているが、マルコは「人々は」と記し、ルカも共同訳は「人々は」としている。しかし口語訳は「彼らは」となっている。フランシスコ会聖書研究所のものも「彼らは」である。G. N. B.⁽¹⁾は Some people（人々は）、N. E. B.⁽²⁾は They（彼らは）である。They を一般的な人たちと見做すなら、「人々は」と訳せない

わけではないが、この場合の They は明らかに 7 : 17, 21, 30に出て来る「ファリサイ派の人々やその他の律法学者たち」を指示していると考えるのが妥当であろう。このような見方をしてみると、この回答でイエスに質問した人は、マタイではヨハネの弟子たちであり、マルコでは人々であり、ルカではファリサイ派の人々やその他の律法学者たちということになる。しかし問われたことの内容が何れも同じ内容のことであった、と言うことは、夫々の福音所の記者が意図的に質問した人たちを取りあげている、と考えてよいのであろう。この考えが正しいとすれば、最初に記されたと見做されるマルコは、特定の人たちの問題としてではなく、一般的な問題として、この回答の問題を取り上げたのを、マタイはヨハネの弟子たちが問題としなければならない問題とし、ルカはファリサイ派の人々やその他の律法学者たちが、と言うことにもなる。このように考えて見ると、この回答の問題点は二つに分けて考えられることになろう。一つは“ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、イエスの弟子たちは断食しないのか”の問題であり、他の一つはイエスが答えられた新郎の友だちと新郎の話、新しい布切れと古い服の話、新しいぶどう酒と古い革袋の話の問題である。何れも三福音書とも殆ど同じ内容であるが、ただルカは5 : 39に“また古いぶどう酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。”と附加している。このルカ独自の附加は先に、私が問題として取り上げた「彼らは」が「ファリサイの人々やその他の律法学者たち」にむけられていることとよく符合する。しかし、この附加的な言葉は、その前の37～8の内容からは異常と思えるものである。美味なぶどう酒を言いあらわす一種の譬喩的な表現であるかもしれない。よく成熟した古いぶどう酒の芳醇した旨さを誇張しているのであろう。

イエスの弟子たちが断食しなければならないのは、イエスが十字架の極刑を御受けになられた後である。ヨハネ迄の古い時代がキリストの新しい時代となるためにイエスの公生涯は避けることの出来ない日々であった。その存在を意味付けているものが福音と呼ばれているものであろう。ヨハネか

らイエスへと移行するその次元は連続するものではあるが次元を完全に異にするものでもなければならない。

(3)

上述の“断食に付いての回答”をさらに一步押進めたのが“洗礼者ヨハネとイエス”(マタイ11:2~19, ルカ7:18~35)の話であるかもしれない。

わたしがこの話に注目するのは、マルコがこれを記していないからである。ではマタイとルカがこの話を記しているのは何故なのか? 記すだけの何らかの理由があったからではないのか。その何故への回答が、私には“およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネよりも偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。彼が活動し始めたときから今に至まで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。すべての予言者と律法が予言したのは、ヨハネの時までである。”(マタイ1:11~13)と記されている言葉にあるようにおもわれる。惟うに、洗礼者ヨハネとイエスとのちがいを、これ程はっきり示している言葉は他にはない。

マルコが書かれたのは、通説に従えば60年代であり、マタイとルカは80年代である。

私の疑問とする何らかの何理由は、この二十年間に起こった何らかの事態にあるのであろう。このような推定に立つと、使徒言行録の18:24~19:5が私には注目されてくる。そこには“さて、アレキサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソにきた。彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたプリスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。それからアポロがアカイア州に渡ることを望んでいたので、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに

助けた。彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたからである。”（18：24～28）と記されている。

上述の引用文の中に“アポロの教えを聞いたプリスキラとアキラが、彼をまねいて、もっと正確に神の道を説明した”（18：26）とあることは注目されてよいだろう。プリスキラとアキラはパウロがコリントに行った時にパウロの世話をしてくれた天幕造りの同業者であった。その彼らがアポロの説教を聞いて、もっと正確に神の道を説明しなければならなかった、ということは、アポロがどの程度の知識をもった説教者であったのかを想像させるのに十分な材料である。これに続く19：1～7には“アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸地方を通してエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と言った。パウロが「それならどんな洗礼を受けたのですか」と言うと、「ヨハネの洗礼です」と言った。そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。……この人たちは、皆で十二人ほどであった。”と記されている。この時代にはアポロのような、洗礼者ヨハネの弟子と見做される説教者が数多くいたのかもしれない。

こういった当時の状況を考えると、マタイとルカが洗礼者ヨハネとイエスとのちがいを強調せざるを得なくなった理由が想像出来よう。

マタイは“洗礼者ヨハネとイエス”の項に“ヨハネは牢の中で、キリストのなさったことを聞いた。そこで、自分の弟子達を送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」”（11：2～3）と記し、ルカは少しくちがった状況から、“ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた。そこでヨハネは弟子の中から二人を呼んで、主のもとに送り、こう言わせた。「来

るべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」二人はイエスのもとに来て言った。「私たちは洗礼者ヨハネからの使いのものです、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方をまたなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。』（7：18～20）と記しているのである。ルカが“これらすべてのことについてヨハネに知らせた”と記しているのは11～17に記されている“やもめの息子を生き返らせる”話を指しているのであろう。これについては改めて考えることにして、この洗礼者ヨハネとイエスの問題を更に考えたい。

ルカはヨハネの二人の弟子たちの懇願に“そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。それで二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまづかない人は幸せである。』（21～23）と、ルカ独自の記事を記し、更に“ヨハネの使いが去ってから、イエスは群衆にむかってヨハネについて話しはじめられた。「あなたがたは何を見に荒れ野に行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見にいったのか。しなやかな服を着た人か。華やかな衣を着て、ぜいたくにくらす人なら宮殿にいる。では、何を見にいったのか。預言者か、そうだ、言うておく、預言者以上のものである」（ルカ24～26、マタイ7～9）と記し、この後に先に要点として挙げた部分が続くのである。そして、マタイは“彼が活動し始めたときから今にいたるまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネのときまでである。あなた方が認めようとすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリアである。耳のあるものは聞きなさい。”（12～15）と続けている。ルカは“民衆は皆ヨハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた。しかし、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、彼らが洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ。”

(29～30)と続けている。しかし、結びの言葉は双方とも略々同じである。

“今の時代を何にたとえたらよいのか。広場に座って、ほかのものにこう呼びかけている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。』ヨハネが来て、たべもしないでいると、『あれは悪霊にとりつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『みろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。”(マタイ16～19, ルカ31～35)と言う。

この洗礼者ヨハネとイエスの話は二つの問題が一つの話になっているのであろう。前半の部分(マタイ2～6, ルカ18～23)はヨハネの弟子たちへの答であり、見聞きした通り、有りのままに報告しなさい、ということであるが、後半の部分(マタイ7～19, ルカ24～34)は群衆がヨハネのこともイエスの事も、極端な言方をすれば、全然解っていない。だがヨハネとイエスの正しさはそれに従うすべての人によって説明される時がくる、ということなのである。

ルカが記している「ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた」(7:18)で始まる“洗礼者ヨハネとイエス”の話は、明らかにその前に記されている。“やもめの息子を生き返らせる”(ルカ7:11～17)話に引続く話であると考えてよいだろう。この話がルカ独自のものであることを考えると両者を切りはなして別個の話としてしまうことには無理がある。

“やもめの息子を生き返らせる”話では、やもめの母親のひとり息子が死んでしまったのをイエスが起き上がらせて、母親に返された時に、これを見ていた人々の言った言葉に重点が置かれている。恐らくこの話では一番肝心な所がそこに集約されているのであろう。“人々は皆恐れを抱き、神を賛美して「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。”(16～17)と記されている。「人々は皆恐れを抱

き」とあるが、「人々は肅然として、神を賛美して、・・・」と記した方が
適当かもしれない。人々がイエスに対して口にする事の出来る最高の讃辞
が述べられているのである。このような状況をヨハネの弟子たちはヨハネに
知らせたのであろう。それが“洗礼者ヨハネとイエス”の前半の話となり、
このような状況を全く知らされていない人たちが後半の話の主人公になって
いるのであろう。両者が対象的に記されているのはこのためである。このよ
うな読み方をしてみると洗礼者ヨハネとイエスの関係には無視することの出
来ない大事な意味を含んでいることが分かる。イスラエルの歴史は一大変革
を必要とし、そこに展開されなければならないイスラエル独自の宗教的な意
味が現されるかどうかの瀬戸際に立っているヨハネとイエスの姿が浮き彫り
にされてくる。しかし、それに気付いた者は皆無であった。ということなの
であろう。

このような推論をしてみると、死んでしまったやもめの息子が生かされ再
び母の手に戻されたということは、死んだも同然であったイスラエルの宗教
がイエスによって生かされることになることを象徴的に物語る一種の譬喩と
して受けとめられてくる。

(4)

共観福音書に見られる次の洗礼者ヨハネとイエスとの拘わりは、洗礼者ヨ
ハネがヘロデによって首を切り落されるに至ったドラマティックな物語かも
しれない。(マルコ 6 : 14～29, マタイ 14 : 1～12, ルカ 9 : 7～9)。

この物語の本筋はヘロデが自分の誕生日を祝う宴席でヘロディアの娘から
踊りの褒賞としてヨハネの首を所望されたことにある。

私が注目したい所は物語の序文とも見られる最初の部分で、マルコが“イ
エスの名が知れ渡ったので、ヘロデの耳にも入った。「洗礼者ヨハネが死者
の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」その
ほかにも、「彼はエリヤだ」という人もいれば「昔の預言者のような預言者
だ」と言う人もいた。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をは

ねたあのヨハネが生き返ったのだ。”（14～16）と記している部分である。ヘロデは何故ヨハネを殺さなければならなかったのかを“ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである”（18）と説明している。しかしヘロデ自身はヨハネを殺そうとは思っていなかったのである。ところが、“ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた”（1～9）のであった。何故できなかったのか、それを“ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることをして、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳をかたむけていたからである。”（20）と説明している。しかし、ヘロディアは虎視眈眈とよい機会の到来するのを狙っていたのであった。その日がヘロデの誕生日であったのである。マタイの記事はマルコの記事をよくまとめているが、一ヶ所大変にちがっている所がある。マタイは14：5に“ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。”と記しているのである。マルコはヘロデがヨハネよりもヘロディアの方をおそれ、マタイは民衆を恐れていたということになる。

ルカの記事はただ“ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は。」そしてイエスにあってみたいと思った。”（9：7～9）と記しているだけで、ヘロデ自身がヨハネの首をはねたのだと述べてヨハネとイエスの関係を強調しているかに思われる。

因に、ヘロデがイエスに会うことが出来たのは、イエスの生涯の最後の段階に於てであった。ルカはそれを“彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと望んでいたからである。それでいろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかつ

た。祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送りがえした。この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。”と独自の記事を記している。此処にはヘロデの尋問に、“イエスは何もお答えにならなかった。”と記している。わたしたちは、何かお答えになられたらよかりそうなものを、と考えるかも知れないが、イエスはヘロデがヨハネを殺した張本人であるということを知っていた。夫故、このイエスの黙殺は千金の重みをもった回答と言ってよい。ヘロデには洗礼者ヨハネと救世主イエスとの宗教史的な意味をもつ関係などは寸毫も考えられなかったにちがいない。

(5)

更に洗礼者ヨハネとイエスの関係を問題としているかにおもわれるのは、イエスが誰であるのかを取り上げているペテロの信仰告白に於いてであろう。ルカはこれを“イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは答えた。『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに『エリヤだ』と言う人も、『誰か昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか。」ペテロが答えた。「神からのメシアです。」イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、次のように言われた。「人の子はかならず多くの苦しみを受け、長老祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」”(9:18~22)と大変簡潔に記している。

マルコはこれに“しかも、そのことをはっきりとお話になった。すると、ペテロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」”(8:32~33)と書き

加えている。

マタイは、イエスの問いかけに、“シモン、ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」(16:16)と答えると、「シモン、バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。”(16:17~20)と、独自の記事を記している。

この“御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた”(マタイ16:20、マルコ28:30、ルカ9:21)ことに就て、Floyd V. Filson⁹⁾は、ローマに対する誤解の生じることを恐れてのことからであったかもしれない、と記しているが、私がこのペトロの告白に就て、特に注目させられるのは、ペトロがイエスから、「シモン、バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」(16:17)と誉められている、ペトロの信仰内容なのである。

その信仰内容は、ペトロの極めて主観的なものであって、イエス御自身がペトロに期待するようなもの、ではないという点である。そのことが、これに引き続く21~23で明らかにされてくる。マタイはそれを“このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている。と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下られ、あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことをおもっている。」と記している。ペトロは自分の本心を披瀝した時、イエスから一喝されてしまったのである。

イエスに誉められたペトロとイエスに一喝されたペトロとには見過すことのできないペトロの信仰内容の矛盾が存在している。詳言するなら、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた時のペトロは、“あなたがたはわたしを何者だと言うのか” (who do you say I am?) と問われたイエスの質問に答えた時のものである。ところが「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」とイエスを諫めないわけにはゆかなかった時のペトロは、“御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている。と打ち明け始められたこと。” (what do you think that I must be?) に対してのものなのである。

who に対する回答には百点満点の優等生であったペトロが、what にたいする答えは落第生ということであった。イエスにとって一番大事なことは、自分でなければ果すことのできないメシアとしての what を弟子たちが本当に理解してくれることにあった。それが全く理解されていないばかりでなく、逆に諫められたのであるからイエスが立腹されるのは当然のことであった。夫故イエスは強い口調をもって「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」(マタイ(10:24~26)と言われたのである。

私はペトロがイエスの what を理解できなかったのは、どこにその因子があるのかを考えなければならないのではないかとおもう。これまでの経過からすれば、ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えて百点満点の誉を得た時、イエスはペトロにこのことを現したのは、人間ではなく、「わたしの天の父なのだ」と言われた言葉に注目したい。ペトロはこの「わたしの天の父なのだ」という言葉をどのように受けとめたのだろうか？ この言葉に含まれている天の父の意図をペトロは理解することが出来たのだら

うか？ イエスの what が天の父の意図に他ならないとすれば、それを知らしめることは絶対に必要なこと、と言わなければならない。私には、それが引き続き記されているイエスの姿が変る“変貌”の記事であたえられているように思われる。

(6)

マタイ17：1～3には“六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山にのぼられた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。”と記されている。マルコも同じように記しているが(9：2～4)、ルカは“みると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人がみえた。”(9：30～32)と独自の記事を記している。

マタイは次の v. 4 に“ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしたちがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」”と記しているが、マルコはこれに、“ペトロは、どう言えばよいのか、わからなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。”(6：9)とつけ加へ、ルカは“ペトロは自分でも何をいっているのか、わからなかったのである。”(9：33b)と記している。

惟うに、ペトロは仮小屋を三つ建てましょう、と言ったのであるが、何も確固とした根拠があって、そう言ったわけではなかったのも、このような言訳をしなければならなかったのかもしれない。マタイがこの点、何も記していないのは、建てましょうと言ったものの、そう言ってしまってから、そ

れでよかったのかな、と言った不可解な気持ちにとらわれていたのかも知れない。そのことが、最後に至って、マタイだけが記している言葉から裏書きされてくる。とにかく、このマルコとルカの加筆は注目されなければならない。

マタイはこの後に、“ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中からきこえた。”（マタイ17：5）と記している。

雲の中から声が聞こえたことはマルコもルカも同じであるが、その言はかなりちがっている。マルコのは“これはわたしの愛する子、これに聞け”（9：7）であり、ルカは“これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け”（9：35）となっている。ニュアンスがかなりちがうと言ってよい。マタイは“弟子たちは、これを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。イエスは近ずき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」”と独自の言を附加した後、“彼らが顔をあげて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。”（17：6～8）と結んでいる。マルコは“弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。”（9：8）と記しているが、ルカは、“その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙をまもり、見たことを当時だれにも話さなかった。”（9：36）と恰も自分たちだけの得意な経験であったかのように記して終わっている。

所が、マタイとマルコは更に、“一同が山をおりるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。”までは略同であるが、マタイは“彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。言うておくが。エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのこ

とを言われたのだと悟った。”（17：9～13）と記して終っている。マルコは、“彼らはこの言葉を心にとめて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。そして、イエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。イエスは言われた。「確かに、まずエリヤが来て、すべてを元どおりにする。それなら人の子は苦しみを重ね、辱めを受けると聖書に書いてあるのはなぜか。しかし、言っておく。エリヤは来たが、彼について聖書に書いてあるように、人々は好きなようにあしらったのである。」”（9：10～13）と記して終っているのである。

イエスの姿が変わるこの記事は“ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのはすばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、もう一つはモーセのために、もう一つはエリヤのためです。」”（マタイ17：4）が示しているように、主要な弟子であるペトロ、ヤコブ、ヨハネですら、イエスとモーセとエリヤとを同格の人物に考えていることを物語っているのであり、このような目でイエスを見ることは誤りであり、正されなければならないことを物語っているのであろう。夫故マルコは、“ペトロは、どういえばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常におそれていたのである”（9：6）と釈明し、ルカも“ペトロは、自分でも何をいっているのか、分からなかったのである。”（9：33c）と記しているのであろう。

三人の弟子たちは、イエスがヨハネの洗礼を受けられた時に、天から聞かれた「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声（マタイ3：17）を聞かされることになる。“ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしのあいする子、わたしの心に適う者、これに聞け」という声が雲の中から聞こえた”（マタイ17：5）と記している

先に記した“ペトロの告白”の所で、ペトロが“「あなたはメシヤ、生ける神の子です。」”と告白した時、イエスが“「シモン、バルヨナ、あなたは幸いだ、あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの父なの

だ。』と言われた言葉がペトロに真実に受けとめられていなかった為に、ペトロはイエスの受難の告白を聞かされた時、本気で「主よ、とんでもないことです」とイエスを諫めたのであった。そのためにペトロはイエスから「サタン、引き下がれ、あなたはわたしの邪魔をする者、神のことを思わず、人間のことを思っている」と一喝されたのであった。この変貌の物語の最後にマタイが“そのとき弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った”と記しているのは、弟子たちに、イエスに対するヨハネの関係が本当に理解されるようにならなければならない、ことを示唆しているのかもしれない。

(7)

共観福音書は洗礼者ヨハネとイエスに拘わる記事をもう一ヶ所“権威についての問答”(マタイ21:23~27, マルコ11:27~33, ルカ20:1~8)で取り上げている。内容はどれも同じようなものである。この問答は、イエスがエルサレムの神殿の境内に入られた時、そこで売り買いをしていた人々を皆追いだし、両替人の台や鳩を売る者の腰掛を倒されて、“『こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家とよばれるべきである。』ところが、あなたたちは、それを強盗の巣にしている。』”(マタイ21:12~13)と記された話が基になっている。“イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威をあたえたのか。」イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼はどこからのものだったのか。天からのものか、それとも人からのものか。」彼らは論じあった。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。『人からのものだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。」そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするの

か、わたしも言うまい。』”(マタイ21：23～27)という話である。

奇妙なことに、この回答は、はっきりした結論が引き出されずに終わっているように思える。

これは福音記者マタイの意図であるのかも知れない。というのは、マタイは独自にひき続いて「二人の息子」のたとえを記しているからである。その譬は“「ところであなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。兄は『いやです』と答えたが、あとで考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました。』と答えたが、出かけなかった。この二人の内、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスはいわれた。「はっきりしておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国にはいるだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ、あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。』”(21：28～32)という話である。私が問題にしたいのは、“あなたたちはどう思うか”で始まる、この“あなたたち”は誰なのか？である。前後関係からすれば当然“権威についての問答”をイエスに投げかけた祭司長や民の長老たち、ということになるだろう。その“あなたたち”がこの譬では正しい回答をしているのである。彼らは、先の回答では、“分からない”と答えたのであるが、この譬では正しい答をしている。ということは、「分かっているのに分からない」と答えたことになる。これは、彼らの在り方に問題があるということである。イエスが彼らを偽善者と呼ぶ理由がここに見出せるのではないか？

F. V. Filson⁶⁾は「この譬はイエスが目的と使命の点でヨハネとの厳密な結びつきを意図していることを示している。両者は差迫った神の国の到来を説いたのである。ヨハネを撥ねつける人たちは敢えてイエスに反対し、神の国に入ることを拒んでいる。“なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなた

たちはそれを見ても、後で考えなおして彼を信じようとしなかった。”と記している32節はヨハネが義の道 (a righteous way) を示していたことを意味し得るが、ヨハネが神への悔改めと服従を求めた正義の在り方 (a way of righteousness) を教えに来たことを、恐らく意味しているのであろう。》と述べている。一考に値することと思う。

祭司長や民の長老たちはイエスに反抗する前に、ヨハネの要請する悔い改めを無視していたのである。このことは洗礼者ヨハネとイエスとの関係を探究する私にとっては無視することのできないことと言わなければならない。

(8)

このように共観福音書に共通に記されている洗礼者ヨハネとイエスに拘わる記事を辿ってみると、洗礼者ヨハネとイエスとの関係は単に洗礼者と受先者といった単純な関係にあるものではないことに気付かせられる。

福音記者ルカはヨハネとイエスの関係を誕生以前にまで溯って関連させているばかりでなく、夫々が果たす歴史的な役割を述べている。

福音記者ヨハネは、更に一步を進めて洗礼者ヨハネとイエスの関係を冒頭の第一章全般に亘って記し、イエスの宮潔めを緊要な問題として第二章の後半で論じているのである。これらの記事は福音記者が意図的に記述しているものとして考えることの方が穏当であろう。

福音記者ヨハネは、イエスの宮潔めに就て論述した後で、“イエスは過越祭のあいだエルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、人間についてだれからも証してもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるのかをよく知っておられたのである”(2:23~25)と記している。イエスの目から見た人間は“新たに生まれなおさなければ、神の国を見ることのできない”人間なのである。(3:3)

このように人間を見られるイエスを洗礼者ヨハネがどのような目でみたの

かは注目に値しよう。“ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。『わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けてきた。』そしてヨハネは証した。『わたしは、霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『霊が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれをみた。だから、この方こそ神の子であると証したのである。』”（1：29～34）と記されている。

更に“その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の子羊だ」と言った。二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った”（1：35～37）……。 “ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った』と行った。そして、シモンをイエスのところに連れて行った。 イエスは彼をみつめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——とよぶことにする。」と言われた。”（40～42）と記されている。

これを読むと、イエスの弟子となったアンデレとペトロはヨハネの弟子であり、その身内の者であったことになる。福音書はこのペトロが主要なイエスの弟子となったことを記しているが、ヨハネによる福音書は、このペトロが大祭司の屋敷のなか庭で、門番の女中に「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」と問われ、「違う」と答えたこと（18：17）を記し、復活のイエスからは「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と三度も言われた上に、「わたしに従いなさい」といわれた。（21：19）ことを記している。これは、イエスを信じるということはイエスに従うこと

でなければならないことだからであろう。福音記者ヨハネは結論としてそれを強調しているように、私には思える。

後 書

イエスを神の独り子と信じることは、聖人とか、殉教者となった人を除いたら、殆んどの人が、「そんなことは信じない」とか「信じられない」と言う。又キリストを信じることはイエスに従うことなのだ、ということも同じように多くの人が思いもしなければ、考えようもしない、のが今日の人々の実情であろう。私は原始キリスト教の時代でもそれに近かったのではないかとおもう。

最初に記された福音書と見做されるマルコは“ヨハネが捕らえられた後ち、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい”と（1：14～15）と記しているが、イエスが宣べ伝えた「神の福音」に就ては何も記していない。けれども、イエスがヨハネから洗礼を受けられた時に、天から聞こえた“あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者”という声を実証することがイエスの使命であったとすれば、この天よりの声こそが神の啓示であり、それを実証することが福音なのである。

天よりの声は共観福音書に共通に記されているだけでなく、ヨハネによる福音書が一層強調的に記していることを考えると、ヨハネ福音書の第十七章に記されているイエスの祈りは、この天よりの声と無関係ではないのかも知れない。イエスを通して弟子たちが、弟子たちを通してイエスをキリストと信じる人たちが、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声を同じように聞かされる時、そこに神の福音があるのかもしれない。そしてこの福音は地の果てにまで宣べ伝えられなければならないものなのである。

私は Biblical Hermeneutics ということが十分解っているとは思わないが、このように福音書を読んでみると、この読み方には所調る主観的解釈と

見做されるものは入り込む余地が全くなく、福音書そのものの理解が、此処から始まってくるように私にはおもえるのである。

註

(1) Good News Bible

(2) New English Bible

(3) A Commentary on The Gospel according to St. Matthew Floyd V. Filson Th.D. A&C Black. P.187参照

(4) 同 上 P.194 参照

(5) 同 上 P.228